

学・会・近・況 共通論題

イスラーム的世界としての 南アジア

—接触領域のダイナミズム—

山根 聡

今回の共通論題は、南アジアをそのウチとソトの異なる価値観が接触する「接触領域（コンタクト・ゾーン）」にとらえ、その接合の様態や相互関係を検討した。接触領域とは、メアリー・ルイーズ・プラット著『帝国のまなざし—旅行記とトランスカルチュレイション—』（Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, London: Routledge, 1992）において、ヨーロッパを中心とする植民地宗主国と非ヨーロッパ諸国との接触を主たるコンタクト・ゾーンと設定したことに始まるが、その後田中雅一氏らによる一連の研究成果により「植民地支配の辺境」のみならず、より広い視点から、ある社会や文化が、様々な他者との交渉を繰り返してきた結果によって成立している、と考えるようになっている。

今般、南アジアでの接触の一例として「イスラーム」を取り上げ、南アジアを「イスラーム的世界」と設定して、南アジアの内的変化のみならず、外来的価値観（イスラーム、イスラーム学）から見た南アジア像を重ねることで、より多角的に南アジア地域像を考えようとした。

イスラーム研究においては、アラブ世界から広がったイスラーム的価値観が、普遍的価値を維持しつつ、可変的な要素によって伝播した地域の価値観を取り込みつつ拡大した経緯に関する研究が蓄積されてきた。イスラーム研究における南アジア地域研究の多くはアラビア語やペルシア語の文献に基づいた思想研究を中心に展開され、南アジアはイスラーム世界の周縁としてとらえられてきた。一方わが国の南アジア研究におけるイスラームもまた、イスラーム文化の諸相が、南アジア固有の諸条件のもとでいかに展開されたかを明らかにしてきたが、イスラーム

はあくまでも外来宗教であり、周縁的存在としてとらえられる傾向があった。

たしかにイスラームは8世紀にこの地域にもたらされた新たな宗教体系である。しかし、イスラームが南アジアで広まった過程を見ると、「イスラーム的」ともいえる類似した価値観や体系が南アジアにあって、これが南アジアの人々にとってイスラームに対する拒否反応を弱めたのではないかと考えてみた。二宮氏や北田氏、子島氏の報告は、南アジアでイスラームが広まった過程を紐解くヒントになる事例があると考ええる。

しかし、そもそも、二つの異なる文化や価値体系が接触するとき、その接触を担うのは、まぎれもなく人間個人である。本報告での事例は、異なる価値観の接触を体験した人間が、異なる要素のなかから自らの利益に資する部分をいかに引き出したか、という事例を検証するものである。

またコメンテーターとして、ベンガルの歴史的展開を文化史として研究されてきた臼田雅之氏と日本中東学会前会長の小杉泰氏をお招きした。他地域の研究者とともに南アジアの諸相を検討するという、いわば「地域間研究」的視点を盛り込むことで、共通論題の場そのものを、異なる地域研究者の「接触領域」として活性化させたいと考えたためであった。

なおわが国と南アジアやイスラームの関係は、植民地経験などを経た欧米とは異なり、その接触がきわめて限定的であったが、日本人研究者が南アジアやイスラームと接することで生まれる「研究での接触領域」は、欧米人研究者のそれと異なるものなのであろうか。接触領域としての南アジア論は、わが国の南アジア地域研究者にとっての南アジア像を問い直す作業にもかかわるのである。

報告は、それが扱う時代に応じて、通時的に報告を行った。

二宮文子氏の報告「ムガル期におけるイスラーム—ペルシア語神秘思想文献を通して見るイスラームと南アジアの接触の様態—」は、14世紀後半から17世紀前半に成立し、北インドを中心に伝播したペルシア語のイスラーム神秘主義文献『神秘の鉞脈』に見られる世界（宇宙）生成論や修業論を通して、南アジアのイスラームに見られる南アジア的要素の様態を分析した。修業論の主題はズィクル（唱名）などの修業の具体的な解説に加え、修業の結果生じる作用・修業の意義を扱う、修業の目的

論であり、本報告では後者に焦点を当てた。

イスラームにおける世界生成論はアッラーによる無からの創造が基本だが、スーフイズムでは哲学における流出論を取り入れた静的な世界生成論も見られる。これは他の宗教伝統との親和性が高く、南アジアのイスラームの世界生成論は、スーフイズムの伝統の中で豊かに発展した。

『神秘の鉦脈』で扱う世界生成論では最初期の被造物である「ムハンマドの光」が擬人化され、神と光の情感あふれる関係を通して世界の各要素が生じたとする。このような描写は、アナトリアのスーフイー、ナジュムッディーン・ダーヤ(1253-4年没)の『下僕達の大道(Mirṣād al-'ibād)』に見られる「ムハンマドの光」の擬人化に、豊かな情感を伴う関係を追加したものともみなすことができる。『神秘の鉦脈』の記述は言語面で『下僕達の大道』と共通するが、内容面では『下僕達の大道』に着想を得て南アジア内で発展した世界生成論の一つと言える。

この作品では修業が絶対的一者との合一をもたらしものではなく、人類の誰もが持つ心に存在する宝を顕現させるとされ、宗派色が薄い点が指摘できる。一方で、本書全体の構成は、宗派的に中立に見える修業論を前半に配し、その種明かしとして、アッラーによる世界創造というイスラーム的世界観に基づく物語を最後に配置している。これは宗教の違いにこだわらず南アジアの地にとけ込みながら、南アジアにイスラームを浸透させたと評されるスーフイズムのあり方と正に合致するものと指摘した。

イスラームと南アジアの接触の結果生じた作品である『神秘の鉦脈』からは、イスラームが新しい環境に接触した場合、イスラームにとって「外来の」要素が「混入」という構図ではなく、すでに存在した要素のいずれかが特に取り上げられ発展していく過程が見て取れる。この文献の構造はまた、ムスリムが南アジアの環境への同化と差異化を、意識的あるいは無意識に選択しながら自らの思想を形成していたことも示している。

北田信氏の報告「ベンガルのエクスタシー」は、ベンガル地方の土着信仰に、仏教・ヒンドゥー教、そして後の時代には外来のイスラームが重層的に混濁していくという現象がみられる点に着目し、以下の二つのトピックを例として、これを観察した。第一の例は、西ベンガル州バンクラ県ビボルダ村において5人のピールが「パターン族の神」などと呼

ばれ、ヒンドゥーの土着信仰のなかに取り込まれてしまったことを見た。第二の例としてはベンガルのバウルとよばれる宗教的放浪芸人を扱った。バウルは混淆的性格の強い宗教を行い、その思想を宗教詩にして演奏する。バウルの宗教的思想・宗教実践の先駆となるものは、金剛乗仏教の修行歌集『チャルヤーパダ』に見いだされ、金剛乗の文献に描かれているような、放浪行者たちの行う秘密の儀式を、バウルも受け継いだと考えられる。一方、ベンガル地方には、バウルと共通する容姿・特徴を持ちながら、同時にムスリムでもあるような芸人たちがおり、「フォキール」と呼ばれている。フォキールの演奏する歌詞はスーフイズムの内容を扱っていると一般的には解釈されているが、スーフイズムの用語を使用するのにもかかわらず、実際には土着的な秘密儀式を扱う古来の修行歌を踏襲している、ということを示した。

子島進氏の報告「ユナーニーの再興とヒンドゥーとの連携：アジュマル・ハーンを試み」は、報告者によるワクフとユナーニーを両輪とするハムダルド財団／製菓の活動についての調査に基づき、ユナーニーやワクフとはことさら関係のなかった創業者一族から、いかに製菓活動を始めたかについて検討した。創業者アブドゥル・マジードの存在を、植民地期インドにおけるムスリムの社会的動向の中に位置づけ、ユナーニーのもつ多義性—イスラーム性を強調することも、アーユルヴェーダと多くの共通点を有するインドの *desi tibb* としての特徴を訴えることも可能—についての理解を深めた。

アジュマル・ハーンは19世紀後半にはユナーニーを近代的に再編成する動きのリーダーとして活躍、1910年にはアーユルヴェーダの医師にも呼びかけて、the All-India Vedic and Unani Tibbi Conference を立ち上げた。1914年の大会では、ユナーニーを「ギリシアに発祥し、西アジアを経てインドに到来した外来の学問」としてではなく、「アーユルヴェーダとともに、ヒンドゥースターンに根ざしたもの」とする視点を示した。アジュマル・ハーンは、ユナーニーを「ムスリムが主たる担い手だが、インドにおいて共有された文化」と考え、(1)ユナーニーとアーユルヴェーダの医師の連携を促し、(2)家族内で受け継がれてきた知識の解放と標準化を図り、さらに、(3)*desi tibb* に対する植民地政府の認識を改めさせようと行動した。AIVUCは、このようなフォーラムとして、1910年代から20年代末にかけて一定の役割を果たした。

彼の一族はヒンドゥスターニー製菓を創業し、その利益をワクフ財源としてユナーニーの教育機関を支える試みに着手し、ハムダルドの活動のひながたができた。アーユルヴェーダとの連携を教育面で形にした教育機関の存在は、アジュマル・ハーンにとって、ユナーニーこそがナショナリズム発現の場であった。

他方アブドゥル・マジードは、ハムダルド薬局創業前にヒンドゥスターニー製菓で働き、ここで多くの知識と経験を得たと推察される。アブドゥル・マジードの二人の息子はユナーニーをアジュマル・ハーンのカレッジで学び、兄のアブドゥル・ハミードは、アジュマル・ハーンが立ち上げたthe All-India Unani Tibbi Conferencをインド独立後、長年牽引した。

川満直樹氏の報告「南アジアにおけるムスリム財閥の事業継承について」は、南アジア、特にパキスタンに存在する財閥を分析の対象としムスリム財閥の事業継承について検討をした。パキスタンが誕生し60数年がたった。パキスタンの財閥一族も世代交代がなされ、現在では創業者から数えて第2世代から第4世代の者が中心となり財閥の運営にあっている。

当然のことだが、代を経ることにより一族員の数も増加することになる。財閥の財閥たる所以は事業の中心に一族が存在していることである。一族は傘下企業の所有権と経営権を一族内にとどめ、一族が分裂せずその権限あるいは権利を行使することで大きな力を発揮することができる。よって財閥傘下企業の「所有と経営」の次世代への継承は、一族にとって重要な課題と言える。

上記をふまえ、一族内における財閥傘下企業の「所有と経営」の継承という観点から本報告では次の点を指摘した。それは財閥内における株式所有構造の変化である。一族員ならびに親会社(持株会社)が中心となった傘下企業の株式所有形態から、複数の投資会社(あるいは持株会社)が設立されそれらも傘下企業の株式所有を行う傾向がみられる。それに加え、一族員の株式所有割合が減少する傾向も確認され、財閥の株式所有構造が2000年代に入り変化してきた。今後はこのような株式所有構造の変化がなぜ起こったのかについての検討が待たれる。

山根聡の報告「現代南アジアにおける急進派」は、現代南アジアのムスリム急進派の組織と活動について、現代的文脈での「ジハード(聖戦)」の概念がパキスタンの連邦直轄部族地域(以下「部族地域」)やカ

シュミールでいかに社会変容をもたらしたかを検討した。

1979年末に始まったアフガニスタでの対ソ連戦争は西側諸国にとって冷戦の代理戦争だったが、ムスリムにとっては神の存在を否定する共産主義政権への「ジハード（聖戦）」だった。パキスタンは財政的支援とともにジハードに参加する兵士も受け入れた。兵士は部族地域を拠点に活動し、部族地域の氏族長らは兵士を、ジハードの大義と「客人歓待」の精神で受け入れた。部族地域はパシュトゥーン人の複数の氏族により支配され、慣習法パシュトゥヌワレイに基づく合議（ジルガ）で秩序を保っていた。地域の自治運動パシュトゥニスターン運動の再燃を危惧するパキスタン政府は、氏族長の権限温存を優先させた。

だが部族地域に流入した兵士が慣習法とイスラーム法の矛盾を指摘すると、部族内の若者の中にも、年功序列でなくイスラームの知識を引き合いに発言力を増す者が出た。対ソ連戦争終結後、長老への支援が途絶えたのに対し、アラブ系兵士への資金提供は続き、彼ら新参者が地域の指導者として台頭した。この部族社会の権力構造の変容に拍車をかけたのがターリバーンである。若者を中心とするターリバーンは、氏族長たちが手を焼いていた無法地帯に安定をもたらして統治能力の高さを印象づけた。商人はターリバーンが拠点とする宗教施設に寄付して中央アジアとの交易ルートの確保を期待した。現在部族地域で「パキスタン・ターリバーン」などの組織がターリバーンに共鳴しているのに対し、ターリバーンと衝突する部族は、伝統的部族社会の維持を主張している。

パキスタンのムスリム急進派の多くは、西側諸国が後押ししたジハードの中、1980年代に結成された。急進派はカシュミール問題を、異教徒ヒンドゥーによるムスリムに対する圧政ととらえ、過激な反政府活動を展開した。

対テロ戦争開始後、パキスタン政府はカシュミールの諸組織を非合法化した。軍と急進派は「イスラーム国家」パキスタンに対する愛国心や、対インド政策で親和性を持っていたため、急進派掃討に消極的だった。消極的な対テロ対策をアメリカが批判すると、軍は急進派を掃討し、カシュミールでのテロ事件は減少したが、その結果、急進派はパキスタン政府を「対米追従でムスリムの敵」として、パキスタン各地でのテロ活動を開始した。カシュミールのムスリム急進派は組織解体などを経てカシュミールからインドの都市部で反政府活動を展開したり、アフガニスタンの国境

地域でターリバーンやアル=カーイダとの接触を行っている。

各報告を通じて、南アジアにおけるイスラーム文化や政治・社会運動の諸側面の紹介を試みたが、研究者間の情報の共有など、課題は残されている。近年、Hasan, Mushirul (ed.), 2008, *Islam in South India* Vol.1-6, Delhi: Manohar では南アジアのイスラームに関する主要文献が集められ、*The New Cambridge History of Islam*, 2010, vol.4,5, Cambridge University Press では南アジアのイスラームに関する諸論文が収載されるなど、南アジアのイスラームに関する研究への関心が世界的に高まっており、わが国でも人間文化研究機構 (NIHU) が平成24年度から、「現代インド研究」プロジェクトと「イスラーム地域研究」プロジェクトの共同研究事業として「南アジアとイスラーム」研究を開始した。今回の報告は、今後のこの分野での研究の発展に向けた一つの試みと位置付けたい。

やまね そう ●大阪大学言語文化研究科教授